



ルーンルーパーズ 3

自衛隊漂流戦記

α L P H α L I G H T

浜松春日

Hasuga Hamamatsu



アルファライト文庫





カルダ

マリースアの飛行軽甲
戦士団の団長。
婚約者に先立たれた
過去を持つ。

ルー

ハイエルフの女性。
美貌とは裏腹に、
残念な性格の持ち主。

レフィティス

聖光母教の神官戦士団副団長。
出世・保身のためなら、
非道な行為も厭わない。

リュミ

聖光母教の神官戦士。
帝国軍の奇襲の際、
久世と共に戦った。

かぶらぎのりお

蕪木紀夫

海上自衛隊海将補にして、
艦隊の最高責任者。
現場主義が災いし、
出世コースから外れる。

加藤修二

海上自衛隊首席幕僚で
蕪木の右腕。
オタク趣味。

ピクティ

帝国のスパイである
ダークエルフの少女。

久世啓幸

陸上自衛隊三等陸尉。
偵察部隊を率いてマリースアへ赴き、
戦いに巻き込まれた。

主な登場人物
MAIN CHARACTERS

協力 防衛省 海上自衛隊 海上幕僚監部広報室

第1輸送隊 呉地方総監部

輸送艦しもきた

第1潜水隊群

潜水艦教育訓練隊

目次

序章 帝都 7

第1章 異変に潜む影 18

第2章 現場の憂鬱^{ゆううつ} 67

第3章 潜入者 107

第4章 捕虜^{ほりよ} 157

終章 決着 196

エピローグ 歩み出す二人 211

間章 運命の終焉^{しゆうえん} 219

序章 帝都

フイルボルグ継承帝国。

建国以来、大小三十一の国家を併呑し、百二十八の部族・種族を束ねる巨大国家。

世界が、神から人間の手に委ねられて幾千年。人の世をつくり上げた者の継承者を自称し、同時に、世界を勝ち取らんとする国。

建国時、多くの人々が世界の継承者を自称するこの国に失笑した。しかし、その国によって、ルールイエ大陸は平定されるに至る。

それは、圧倒的な軍勢力と、継承帝国第七代皇帝の稀代の英雄性によって成し遂げられた快挙であり、愚拳であった。

その第七代皇帝の名は、エサイアス・アスガルド・フイルボルグ。

賢狂帝と畏敬を込めて呼ばれ、苛烈さと類稀なる手腕を持ち、僅か一代で帝国を五倍にまで拡げた男だ。

四億一千万人の帝国臣民と隷属民は、望むと望まざるとにかかわらず、彼の下知のもと

に生き、そして死ぬ運命を負う。

彼が座する帝都アガルタ——百万の帝国臣民と、それを支える数倍の数の奴隷が住まう栄華と腐敗の都。

その中心に、皇宮は位置する。幾層もの城壁が周囲を囲い、それでいて中央部には十分な広さが確保されている。恐ろしいまでに巨大な、要塞であり城であり、そして宮廷であった。

平民は、特別な式典で広場が開放されるとき以外、豪華絢爛な内部を見ることはない。だが、そんな数少ない機会であっても、一度でも目にすれば、死ぬまでその美しさを忘れることはないだろう。

何層もの城壁の中には、まるで世界の春を集めたかのような花咲き誇る庭園と、あらゆる大陸の泉を持ち寄ったかのような水路と人口湖がある。それは、この帝国の力を見せつける、一種の象徴とも言える。

いったい、どうやってこんな庭園を維持する水道施設を、いや、そもそもどうやってこれだけの軍事と文化両方を兼ねそなえた複合施設を建設できたのか。

他国から交渉に訪れた使節団は、それを考えただけで、帝国の国力に震え上がる。戦火を交えずに降った国も少なくはない。

その皇宮の地下には巨大な空洞がある。

天井には、恐ろしく緻密に描かれた天体図が描かれている。描かれている、と言うと語弊がある。その星々は、今この瞬間に空にあるであろう星の瞬きを忠実に示した、動く絵画であった。かつて、有翼の民が使っていたとされる、もはや歴史の彼方に忘却された古代魔法によるものだった。

空洞内には、円を描くように大量の机が置かれている。

そこに数百人の術士が座り、一心不乱に星の解析を行っていた。

ここは、最高機密にあたる継承帝国占星機関の一室なのだ。

万物の動きは星の動きに連動している。豊作や凶作が起こるのも、人が生まれることも死ぬことも、全ては星の動きによって説明されうる。

微細で複雑怪奇な、数え切れない星々の動きを分析し、この世界に起こっていることを明察する。つまり、この機関は帝国の諜報機関の一つと言っても過言ではない。

円形の中心部に座って、ペールを被り瞑目する一人の女がいた。

法衣に身を包み、年齢や容姿を窺うことはできない。

彼女のもとへ、一人の男が近付く。

「来たりしか？ 賢狂帝」

女は振り返りもせず、それどころか微動だにせずにそう問うた。

「うむ」

重く、よく通る声が響く。彼は女の前で立ち止まった。継承帝自らがここへ足を運ぶのは珍しい。

だが、術士達は一切動じず、星の運行の解析に没頭していた。そうでなくては、占星という終わりのなき探究の道へは飛び込めない。

そんな彼らに、不敬を正すどころか、むしろ好感の目を向けている継承帝は、女に静かに尋ねた。

「南伐混成軍が敗れた件、何か確かな相は出ているか……？」

一瞬、びくりと女に感情らしきものが浮かぶ。

そのことを珍しく思う継承帝は、腕を組んで返答を待った。

「否」

女の言葉からは、やはり感情が消えている。

「ふむ、星を乱さないなら取るに足らん異変ということか？」

継承帝は首を捻った。

やはり、何かの間違いなのだろうか。

帝国軍として一枚岩ではない。だが、南伐混成軍のリヒャルダ將軍は、自分への忠義が厚いと思われたし、無謀な用兵をして自滅するような無能でもない。彼は、人を見る目にはそれなりに自信があった。だからこそ、彼女を登用したし、前任の謀反人を斬首し、一族

を根絶やしにもした。

ならば、なぜ南伐混成軍が、マリースアなどという蛮族に毛が生えた程度の小国風情に敗北したのか？ それも、退却できないほど徹底的な損害を与えられて。

生きて帰ってきた者の報告も不可思議なものだった。

ある者は『空飛ぶ竜を射落とす百発百中の「大砲」にやられた』と言い、ある者は『光る矢が全ての竜を焼き尽くした』と言う。

報告が荒唐無稽すぎて、前線も正式な報告を上げるのに手間取ったくらいだ。ただ、精鋭の竜騎士団二個が全滅したのは事実だ。

人を介した不確かな情報では、埒が明かない。

そのため、占星機関だった。

「否。星は出ている」

「ほう……どんな星だ？」

継承帝は身を乗り出した。

「太陽なり」

「太陽だと！」

太陽は、滅多なことでは自らの運行を乱さない。

全ての星の中心であり、運行が乱れるときは、世界が震撼するときだ。

彼女の言葉に、継承帝は珍しく動揺の色を見せた。

「続けろ」

「現れた者あり」

「現れた者？」

「其はこの世界に在らざる者にして物なり。この世界に混沌と秩序をもたらさん存在なり」

口寄せや予言めいた言葉に、継承帝は再び首を捻った。

だが、彼女を非難したりはしない。こうした情報でも貴重なのだ。彼ら占星機関のもたらした情報で、勝った戦争や脱することのできた危機は数え切れない。

「混沌と秩序……？」

「相反するもの。然してまた不確かなるもの」

女は淡々と語った。

「その者達、その物達。世界を敵に回し、世界を味方に付けんとするものなり。破滅を呼び、戦禍を呼び、そして平和を呼ばんものなり」

継承帝は、じつと彼女の言葉に耳を傾ける。

「赤き陽と純清なる白の旗に集いし戦士達。其は、召喚されし軍勢なり」

「召喚されし軍勢……」

召喚されし軍勢。

神話にしばしば登場する、ある意味ではありふれた単語だ。

だが、実際に現れるとは思ってもみなかった。

異世界から、この世界へと何者かが召喚された。

その召喚された者達。そう、彼らが竜騎士団を破った。

賢狂帝の脳裏に、異世界から現れた英雄達が竜騎士達を倒す様子が浮かんだ。

「太陽神の遣わせし戦士、か……なかなか面白い番狂わせだ」

彼は天井の天体図を見上げ、まるで挑むかのように睨んだ。

そして拳をかざし、太陽を表す一際眩しい光を潰すように手を握りしめた。

血が滾っていた。

（太陽の戦士、召喚されし軍勢とな……一体どんな連中なのであろうな？ くく、陽のどとく全てを焼き尽くしてきた狂戦士か？ それとも、陽の照らすところ全てを平らげてきた豪傑どもか？）

彼は喜んでいた。

自分の前に、立ち塞がる者が現れたことに。

まだ見ぬ異世界の英雄達をねじ伏せる歓喜が、待っているであろうことに。



マリースアの太陽は熱い。

南国なのだから、まあ当然といえば当然だった。

そして、そんな中で宿营地周辺の草刈り作業や環境美化活動をやるのが、ひどくしんどいのも当然である。

ついでに言うと、そうと分かっているのに強行するのが自衛隊という組織だった。

雨天実行、風雨強行、荒天断行。自衛隊の辞書に中止という文字はあんまりない。

ブインブインと肩掛け芝刈り機をぶん回しながら、汗だくだくの市之瀬二等陸士は、隣の久世三等陸尉にボヤいた。

「異世界にまで来て、自衛隊って何でこんなくつだらねえこと続けるんでしょね？　なんつか、モンスター騒ぎでしょっちゅう出勤してんだから、後回しじやいかんのすか？」
「服務規則に書いてるからだだよ。規則は神で、俺らはその奴隷なの。イラク行こうが異世界に来ようが関係ないの。他人様の国にお家を間借りしてるんだから、手入れを手抜きしちゃダメなの」

頭にタオルを巻き、伐採済みの草やゴミを片付けている、若い幹部の久世が投げやりに答える。現場幹部は、上からの無理難題と下からの不平不満を一手に引き受ける悲惨な立

場だった。多少投げやりになるのも無理からぬことである。

「防衛費削減でボーナス減に安月給。3K職場で、しかも異世界なんか飛ばされて……はあ、やっぱ派遣決定の前に転職しときゃよかったな」

その後ろで、若い士長がヤケっぱち気味に言う。

「親方日の丸どこへやら」

「んだんだ」

「おめえら、異世界で辞めても退職金は出ねえぞ」

隊員達は、指揮官の久世が汗水流しているだけあって、不満も特に真剣なわけではない。とはいえ、こここのところの忙しさはハンパではなかった。市之瀬が言うように、異世界に来てまでこんな雑作業をやる必要があるのか、なんて疑問の一つも出てこようというものと、そんなときだった。

一人の隊員が息を切らして走ってくる。

久世は額のタオルを外し、作業帽に被り直すと、敬礼してくる彼に向き合い、答礼した。

「久世小隊長！　また出ました！　街の東側で、今度は巨人型のモンスターだそうです！」

「また出たのね……」

げんなりしながらも、久世は、ドロドロドロと芝刈り機をアイドリング状態にして、部下達に振り返った。

「小隊、雑作業一時中止！ 出動するぞ！ 完全武装にて舎前に集合！」

「またかよ……」

部下達がボヤク。

ついこの間、レヴィアタンを退治した海自のイージス艦が意気揚々と帰還してきた直後に、街中で大量に現れた「ゴブリン」とかい魔物の群れに宿営地を襲われたばかりだった。やむを得ず警備用に据え付けていた機関銃で応戦するも、ゴブリンの怒濤の攻勢により、小火器だけでなく重火器まで使用したせいで、街の一角を吹っ飛ばすという大失態を演じている。

民間人がいないと判断し、ゴブリンの群れに向けて10式戦車を押し出し、対戦車榴弾をぶち込んだ場所が、建国の英雄を奉った霊廟の近くだったため、敵を撃滅したのに、教会と内地軍から抗議される事態にもなった。

爆音とともに立ち上る黒煙は、帰還直後のイージス艦からもよく見えたらしい。

やらかした、10式戦車の戦車長をはじめとする乗員達は、全く懲りていなかった。戦車乗りは血の気の多い輩が集まるせいとか、むしろ得意顔だったのを、久世は思い出す。しかも、ゴレムとゴブリンのデザインの影響、マークを車体に描いていた。

ハミエア女王が「建国の英雄は剛気な王じゃったから、面白いのが見れたと喜んでおろうよ」とフォローしてくれなかったら、どうなっていたか分からない。

しかし、そのフォローと海自のレヴィアタン退治の影響か、最近では一部の内地軍の貴族などが「モンスターが出たら、あいつらと呼ばばいい」と考えるようになったらしい。

余計に事情が複雑になった気がしないでもなく、この変化がいいことなのか悪いことなのか、久世達にはいまいち分からなかった。

「草刈りよかまだマシか？」

「行くべえ」

彼らは、草刈り機を止めながら、普通なら英雄や名の知られた戦士が出張るべき敵を倒すために出動していく。

だが、出動の名目は「害獣駆除」という、農家の要請でイノシシや熊を退治に行くのと変わらないものだった。倒せば莫大な報奨金や名声が手に入る怪物であるにもかかわらず、彼らには昼の弁当代くらいしか手当が出ないのである。

英雄というより、末端の公務員の悲哀しか感じさせない彼らが、今この瞬間にも、どこかの強国で召喚されし軍勢と呼ばれ、畏怖されていることなど、知るわけがなかった。

第1章 異変に潜む影

マリースア南海連合王国の王都セイロード。

継承帝国による奇襲侵攻から日が経ち、ようやく復興への道筋が見えてきた。

かつての活気を取り戻すまでには至っていないものの、最近では食糧の流通も回復しつつあり、地元の店は再開するところも増え、通りには行商人の馬車や鳥引き車の姿も見られるようになった。

表向きは、内地軍による治安回復と教会による献身的な民への支援があつたためであると言われている。

だが、このところ、以前のようにその発表を信じるセイロードの市民は減っていた。人の噂は止められない。

聖光母公園に駐留する、異世界からの軍勢の活躍は、もはや公然の秘密となりつつあつた。

邪龍レヴィアタン退治を歌うのが、吟遊詩人の日課に近いくらいだ。英雄物語はいつ

の世も人を惹きつける。内地軍によつて、港は関係者以外立ち入り禁止になっていたが、市民の中には、郊外の丘から灰色の艦隊を見物に出かける者達さえ現れていた。

それに――

「また出たぞお！ 今度はキュクロプスだあー！」

王都の治安を掌握している内地軍の早陸鳥が、各部隊へ伝令を叫びながら駆け回つていた。

不安げな表情でそれを見守る市井の人々だったが、当初のような混乱はない。

キュクロプスといえば、一つ眼の巨人であり、古代文献に登場する怪物である。今でも上位召喚獣として戦争に利用されることがあつた。そんなものが街中に現れれば、普通は蜂の巣を突いたようなパニックが起こるだろう。

だが、それがない。

それどころか――

「今度はどんなのが出てくるんだろうな？」

魔法学院の若者達が、海狼の毛皮亭と看板が下がった飯屋から、お椀を片手にぞろぞろと姿を現す。どこかワクワクしている様子だった。

「出てくるって、キュクロプスだろ？」

「違うよ。ルーントルーパーズの魔導兵器がさ」

行儀悪く飯を食いながら、悪友の脇を肘でつつく。

「ああ、そういえば、エンシエントゴームが出たときに使ったっていうすつごいの、また来ないのかな？」

「アレは、噂じゃ切り札らしいから、簡単には出さないらしいぜ？」

「へえー！ おい、現場近くに行つてみよーぜ！」

「よし！ 行るか！ レティアちゃん、お勘定！」

学院はつい昨日、授業を再開したもの、彼らは今日もサボって街をはつつき歩いていた。目的はもちろん、騒ぎが起きたときに現れる、異世界の軍勢を追っかけることだ。

しかし、それは彼らだけに限った話ではない。

破損した建物の屋根の上で修理中だった大工達が、何か見えないものかと遠くを眺めていた。

「まあ、またあの異世界から来たつてえ連中が、何とかすつたら」

「だなア。人魚の国を救っちゃう連中だ。間違いいねえ」

復興のために毎日家屋の建て直しに汗を流す大工達も、もはや風物詩のような感覚でいる。

そこへ、街角の食堂から、ポニーテールの女の子が出てきた。

「ちよつとー！ おじさん達ー、食事冷えちゃうよー？」

「おう、レティアちゃん。ちつと待つとつてくれや。こつからどうも見えそうなんだわ」

「もう！」

レティアは腰に手を当て、困ったお客さんだわ、とボヤいた。

(……でも、大丈夫かな。クゼさん達)

彼女は、面識のある異世界の戦士のことを思い、少し心配そうな顔をした。彼女の脳裏に、いつも仕事を背負い込まされている、どこか余裕がない、あの青年の姿が過る。巷で言われているような、英雄でも蛮族でもない、等身大の人間に違いない彼のことを考えている内に、彼女は何だかおかしくなった。



「一般市民の避難誘導は完了したか？」

「もう少しよ！ 子供と老人を優先して逃がしてる！ とりあえず、ここから半径二ブロックはほぼ無人よ！」

当該地区の中では、内地軍の部隊が慌ただしく活動していた。

彼らは避難誘導を行っていた。白馬に乗った騎士達の権威に、市民達も大きな混乱を見

せずに従っている。

とはいえ、短時間の内に、王都という人口密集地で、数ブロックの市民を丸ごと避難させるのは無理がある。

普通なら、騎士達は歩みの遅い市民達に苛立ち、敵に向かって勇壮に進撃しようとするのだらう。

だが、ここの内地軍はそうではなかった。

「きゃ……！」

母親とはぐれた幼い女の子が転んだ。

「大丈夫か？」

すると、いかつい甲冑姿の騎士が馬を下りて駆け寄り、その子を抱きかかえて母親を捜しはじめた。

周囲の市民達は、その姿に唖然とした。

騎士が、平民の子供のために膝を折り、そして母親を捜すという手間をかけているのだから当然である。

傍若無人な貴族に幼子が斬り捨てられる事件こそあれ、平民のために貴族が汗を流すなど、ありえないことだった。

「あ、ありがとうございます！ ああ……な、何というご無礼を……」

「いいんだ」

貧民の親子に向かい、侮蔑など一切なく、若い騎士はにつこりと笑った。

「我々は、シコウムイン」なのだからな」

聞き慣れない単語に、親子がきよんとする。

「え？ は、はい……？」

「さ、早く向こうへ。ここはじきに戦場になる」

内地軍白戦馬騎士団は、内地軍の命令系統からは逸脱寸前の、独自の作戦行動に出ている。彼らは数日前、異界の巨大な鉄船から戻ってきた若者達によって指揮される部隊である。

内地軍では、市内にモンスターが現れた場合、何よりもまず敵を倒すことを優先すべしという通達が出されていた。だが、彼らは敵の撃滅よりも、市民の生命を守ることを優先している。もともと、騎士として弱者を守るのも建前上は任務の一つなので、表だって命令違反をしているわけではない。

先程、女の子を助けた若き騎士ユラウスは一息つき、隣の魔法騎士のディアナに言った。

「上出来だ、これで彼らさえ来れば——」

大きな被害は出さずに済むはずだ、と言おうとするのを遮り、鋭い声が響いた。

「見損なったぞユラウス！」

甲高い女のものだっただ。

振り返ると、羽毛を鮮やかな深紅に染め上げ、鎧を施した戦陣衣装の陸鳥に乗る軍団がいた。

騎乗する騎士の背中にも派手な羽根飾りが装備されている。内地軍の中でも、勇猛さで知られる騎鳥戦士、いわゆる「シバーヒー」達だ。

彼らを率いる女が、ユラウスを睨み付けていた。

短い金髪と、火の鳥の家紋の入った額当て。

それを見た瞬間、ユラウスは彼女のことを思い出した。

「ヴァレン？ ヴァレンではないか！」

ユラウスは彼女のもとへ駆け寄る。

「久しいな、王立士官学校以来か？」

懐かしさがこみ上げていた。

そこにいたのは、かつての同期であり、騎士の絆を結んだ、親友と呼べる女だったのだ。

だが、彼女はそんな彼を拒絶する。

「気安く我が名を呼ぶな！ 痴れ者！」

「いきなり何よヴァレン！ 私達、同期でしょうに!？」

ディアナが間に割って入る。

見ると、騎鳥戦士団の視線には殺気が籠もっていた。

特に、その指揮官であるヴァレンは、まるで裏切り者を見るかのような冷酷な目を向ける。

「知っているぞ、お前達があの異世界からやってきた連中の手先になっているとな！」

「……ベレンゲル將軍から聞いたのか？」

「ふん、將軍閣下に関わらずとも、内地軍の中では有名だ。あの船に乗った連中は魂を抜かれて帰ってきたとな。一体奴らに何を吹き込まれたのか、この恥さらしめ！ それでも榮えあるマリースアの騎鳥戦士か！」

ユラウスは罵倒に一切動じなかった。

確固たる信念を宿した目をじつと彼女へ向け、断言する。

「ああ、そうだ。騎士だからこそ、俺は彼らに忠を尽くすのだ」

ディアナが彼に同意する。

「そうよ。真の騎士道に殉じがためのこと」

ヴァレンは、優秀な魔法騎士であり、内地で有数の大貴族の出身でもあるディアナが、そんなことを口走ったことに愕然とした。

誰よりも貴族のプライドの強かった彼女が、平民じものために騎士があるのだとほざいている。それは、まるで質の悪い冗談のようだった。

ヴァレンは彼女に目を覚まして欲しいと思い、周囲の有様を強調した。

「真の騎士道だと？ 見ろ、何だあの姿は！ ガキや老婆を背負って駆け回るのが騎士の姿か!?」

ディアナは迷いなく頷いた。

「そうよ。民あつての騎士。騎士が守らんは民草」

「ふざけるな！ 騎士あつての民であり国家だ！ 鳥が卵から生まれるのと同じで、逆はない、真理だ！」

「ヴァレン、頼む、貴様の部隊も避難誘導を手伝ってくれないか？ おそらく、そろそろ彼らが来てくれる。となれば、大きな戦闘が……」

ヴァレンは聞き入れなかった。

それどころか、彼女の配下までもが抑えきれなくなった感情を爆発させてしまう。

「馬鹿を言うな！ 王都を守るのは我ら内地軍だ！」

「敵は強大、相手にとって不足はない！」

失望感でユラウスが黙っているのを、競り勝つたと勘違いしたヴァレンが薄く笑う。

「ふん、それに奴を倒せば、阿呆な平民どもも誰のおかげで平和に暮らせるのか分かって、我らに感謝しようというものだろう？ そんな不様なことをするよりずっといい」

見下げた奴だとばかりに手綱を操り、彼女は部下を引き連れて進撃を開始した。

勇壮に数十羽の陸鳥が砂埃を立てて突進していく。

その後ろ姿を、ユラウスはじつと見送る。

ややあつて、ディアナがそつと側に寄り添った。

「彼らなら、何と言うのだろうな……?」

ユラウスはぼつりと寂しげに呟く。

「そうね……きつと私達では考えもつかないことよ」

ディアナはそう言つて彼の手を握った。

——と、そんな雰囲気を持ち壊し、彼らの横を車列が通過したと思いきや、先頭のバジエロが『バックします、ご注意ください。バックします、ご注意ください』と間の抜けたアナウンス音を響かせながら戻ってくる。どうも、前にゴーレムにぶつ壊されたバジエロを、部品を寄せ集めて修理したためか、電機まわりがちよつとおかしいのだ。

「来たか……ルーントルーパーズ、異界の軍勢よ」

ユラウスはそんな連中を、まるで英雄の凱旋を目にしたかのように、頼もしげに見つめた。

サイドウインドウが開き、中から緑色を基調にした、まだら模様の服を着た若い男が顔を出す。

「あーどうもどうも、地元自治体の要請を受けまして害獣駆除に参りました。私が責任者

の久世と申します。あ、とりあえずこちらの活動許可願いにサインお願いしますね」
相変わらず、強敵を相手にしようとする者達とは思えない地味さでもって、彼らはやってきたのだった。



人の身の丈^{たけ}はともあろう棍棒^{こんぼう}が、巨人の豪腕^{ごうわん}によって振り下ろされた。

解体作業の現場のように、家屋が簡単に破壊され、地響きを立てて倒壊する。土埃^{つちぼし}が舞い、その場はまるで一つ眼の巨人による遊技場だった。

「ぐ……うう……」

そんな中、ヴァレンは横たわり、うめき声を上げるしかない自分を呪った。

辺りには、果敢^{かかん}にも巨人に挑み、無惨^{むさん}に薙ぎ払われた仲間の姿がある。気を失った者はいても、死者が出ていないのが奇跡だった。

だが、あの巨人は慈悲^{じひ}でそうしたのではない。特注^{とくしゆ}の戦装束^{せんじようそく}も含めれば、一羽でちよつとした家が建つほどの価格である陸鳥達など、あるものは棍棒^{こんぼう}の一撃で即死し、あるものは投げられた馬車^{ばしや}の下敷^{したじ}になり、またあるものはむしり喰^くわれた。

自分達は、目障^{めざわ}りな害虫程度にしか認識されていない。エサにさえ不適であると、捨て

置かれているに過ぎないのだ。

「クソ……クソお……」

ヴァレンは血を吐きながら涙を流し、自分が部隊を全滅させてしまったことへの罪悪感に苛^{さいな}まれた。

それと同時に、腹部の痛みが死への恐怖となって彼女を襲った。

肋骨^{りゅうこつ}が折れ、内臓に刺さっているのは素人でも分かった。そして、それが致命傷であり、じわじわと自分が死ぬ定めであることが、彼女を絶望させた。内臓への損傷は、治癒^{ちゆ}魔法が間に合ったとしても回復が難しい。

自分は、今日が終わる前に、おそらく死ぬ。

死にたくない、と彼女は土を握りしめて痛みを怯^{おそ}えた。

名誉のために死ぬのだと覚悟していたはずだった。

死力を尽くして戦えば、たとえ奴を倒せずとも、手痛い一撃を加えることが可能であると信じていた。

あの召喚されし軍勢は、まるで戦士らしくないにもかかわらず、今までいとも簡単に怪物^{ばく}どもを平らげてきたではないか。名誉ある我ら精鋭の騎士団が、そんな奴らにひけをとるはずがないのだ。

そのはず、なのだ……

彼女は、どうしてこんなことになったのか、それが分からなかった。

「た、隊長……」

「マ、マリド、しっかりするんだ」

ヴァレンは、近くに倒れている副官の声を聞いて、必死になって彼の側へと這い寄った。彼の顔には死相^{しそう}が出ていた。

もう助からない、とヴァレンは絶望した。

マリドの腹を、折れた建物の支柱が貫いている。そう大きな支柱ではないが、槍^{やり}ほどの太さの棒に腹を抜かれて、生きて帰れるとは思えない。

「じ、自分の、婚約者に、愛して、いると……」

「や、やめる……そんなことを言わないでくれ……」

「で、ですが……」

彼はまだ二十歳になったばかりの若者だった。良家の娘との縁談がまとまり、幸せな結婚が待っているはずだった。

彼女は、彼の言葉を聞き入れる勇気がなかった。

名誉のためだと部下を率いた。

だが、その結果、彼らの幸せを、家族を、全て無にしてしまった。

これが、戦場なのだ。

これが、現実なのだ。

何の救いもない、死の世界……

「う……う……」

彼女は空を見上げた。

空は驚くほどに快晴。

そこが、神の住む世界と呼ばれるのが、こんな状況でも納得できてしまう。

「お願い……だ……神よ……部下達だけでも救ってやってくれ……」

そんなものが通じるはずがないという確信がありながら、彼女は許しを請うようにそう呟く。

と、彼女は背中に何かがやってくる地響きを感じた。

陸鳥や、ましてやキュクロプスの足音ではない、別種の何か。

彼女は、痛む身体をよじり、それを確認しようとした。

そして、彼女は見た。

自分の目の前に、何かが目にも留まらぬ速さでやってくると、甲高い悲鳴^{かんたか}のような音を上げて止まったのを。

「要救助者確認っ！」

久世は、一般市民に被害者がいないのを不幸中の幸いと感じる一方で、内地軍の将兵の被害に焦りを感じた。何でもこんなことになっているのだろうか。

末端幹部の自分が心配することではないが、内地軍の勢力圏で自衛隊が作戦行動を取るのにはやはり無理がある。自衛隊の活動を許可している勢力と許可していない勢力がない交ぜになっている、グレーな現状ゆえに起きた悲劇だ。異世界に限った話ではなく、国連軍の活動では、しばしば中立性が曖昧になつてこういう状態が発生する。

だが、どうやら今の時点で死んでいる者はいない。

ならば、あとは時間との勝負だ。

難しい判断だった。人員を救助に割り、車輛を負傷者の後送に割くと、手持ちの戦力は激減してしまう。

ならば、と彼は即座に判断した。

「まず救助を優先とする、担架班、衛生班下車！ 各車輛、害獣への発砲を許可する。救助作業中に接近させるな！」

救助作業と並行して、奴に与えられる限りの打撃を与える。短期決戦だ。

「了解！」

96式装輪装甲車のハッチに取り付けられている12・7mm重機関銃の薬室に、射手がレバーを二回引いて初弾を押し込んだ。このブローニングM2重機関銃は、その完成度の高さと頑丈さゆえに、世界各国の軍隊で五〇年以上にもわたって使用され続けている重機関銃のベストセラーである。破壊力、射程距離ともに折り紙付きで、国産の銃よりも信頼性が高いと、自衛隊の現場レベルでは何かとこれを引っ張り出す傾向があった。

「援護射撃イ！」

久世の号令で、車輛から一斉に火花が飛んだ。

ビリビリと身体に衝撃を感じるような重い発射音が辺りに響き渡る。

「ウロオオオオオ！」

巨人は、自身の筋肉にめり込む強力な矢尻に怯む。

だが、致命傷は与えられていなかった。奴にとって、筋肉は鎧の一種である。急所であるらしい一つ眼をかばい、踏み止まっている。

久世は、巨人が反撃に転じるのを恐れ、無線に叫んだ。

「小銃班は建物を盾にしつつ奴の側面へ回れ、対戦車班は俺に続け！」

「了っ！」

救助作業を行う担架班と衛生班を横目に、久世は車を降りた。戦闘担当の隊員らが、完全武装の市街地戦装備で小銃や重火器を担ぎ、彼に続く。



銃撃音とバケモノの雄叫び、苦痛に呻く騎士達。

そこは阿鼻叫喚の地獄絵図に違いなかった。

怪我が酷く、痛みのにたうつ者に、衛生班が鎮痛剤を投与する。
そんな中、救助をかたくなに拒む者がいた。

「やめろお！ 私はお前達の情けなど受けない！」

久世は足を止めてその人物を見た。勝ち気そうな、短い髪をした女性だ。どうやら将校らしい。

幹部の自分の言うことなら聞くかもしれない、と彼は彼女に駆け寄った。

「すみませんね、自分が受けた命令は、一人の犠牲者も出さずに害獣駆除を実施せよです。あなたには嫌でも生きていてもらわないと困るんです」

「ならばなおのこと、私が生きているわけにはいかぬ！」

「話の分からん人ですなぁ……」

久世は、この状況で余計な懸念を増やしてくれる人物に呆れた。

だが、『常識で考えたら、ここで無茶なことはいらない』という感覚は、日本国内でだけ通用する概念だ。メンツにこだわった組織の人間が無茶を通そうとすることなど、外国では珍しくない。彼は、久留米の幹部学校時代にそんな幹部向けの講義を受けたのを思い出し、対応には細心の注意を払うことにする。こういうときに下手を打つことが、島国根性

の日本人には多い。

「放せえ！ 私は生き恥などさらさぬぞお！」

久世はそつと隣の衛生隊員に耳打ちした。

「責任持つから、この人にちよつと多めに鎮静剤打つといて」

「りよ、了解」

気丈に振る舞っているとはいえ、大怪我をしていることに変わりはない。

簡単に押さえられると、彼女はモルヒネを注射される。

痛みが嘘のように引いていくのと同時に、彼女は猛烈な眠気にも襲われた。

意識が朦朧としてくる。

「私は……私は騎士として誇りを……だから……」

うわごとのように彼女は呟く。

久世は、そんな彼女を気の毒に思った。

自分が、こんな形で部下を失ったら、果たしてどう思うだろうか。彼女に対して、とても他人事とは思えない感情を彼は抱いた。

今後のことも考え、暴行されたと言いつけられないように、そつと、彼女の耳元で話す。

「立派なことです。あなたのような人が、この国には必要なんですよ。だから、ここで意味なく死んじゃだめだ。その命の捨て場所はずっとここじゃない」

「……私が……必要……？」

「ええ、そうです」

久世は、あれだけ自分達を敵視してきた内地軍に対しても、気の毒だと感じていた。

悲惨な目に遭っている者を、それが同じ武人であるのならなおさら、ざまあみるとは思わない……思えないのが、現場を知る者の人情なのかもしれない。

「生きていれば、恥や悔いをそそぐ機会だってある。必要なのは、諦めないことだ」

「諦め……ないこと？」

「復興が必要なのこの国が、あなたのような誠実な騎士を失うことを望んでいるわけではないでしょう？」

「わ、私は……私は……」

鎮痛剤によって眠気が襲ってきたのか、彼女はうつらうつらとし始める。

「大丈夫、きつと助かります」

内地軍の縄張り争いに巻き込まれているので、彼女には文句の一つも言っちゃりたいところだが、怪我人にそんな鞭打つような真似はできないと思ってしまふのは、日本人の妙な配慮の心だった。

久世は彼女の肩を優しく叩いてやると、戦場へ向かうとする。

その彼の手をきゅっと握り、ヴァレンは尋ねた。

「あ、あなたの……名前を……聞かせて……」

「久世啓幸ひるぎといいます」

関係のよくない部外者とはいえ、名乗るくらいなら、まあいいだろう。部外者と角が立たないようにするのは、自衛隊という微妙な組織では大事なことだ。

「部下を……頼む……」

彼女はそう言い残すと、意識を失った。

久世はため息をつく。

本音と建て前。彼女が聞いていないなら、ボヤきの一つもしたくなる。

「なんだかなあ……どうしてこう背負わなくていいもの背負わされるんだろう、俺……」

隣で、久世を守るために狙撃銃を手に警戒していた市之瀬二士が、にやつと意地の悪い笑みを浮かべた。

「人徳じゃないっすか」

やかましい、と市之瀬に言うと、久世は立ち上がり、戦列へ戻っていった。



戦場と化した市街地を、隊員達が駆けていた。

久世は、対戦車兵器を携行した部下を率い、キュクロプスの死角へ回ろうと試みていた。キュクロプスには、車輛班による正面からの牽制けんせいの射撃が加えられている。

キュクロプスは一つ眼の巨人。ということは、死角がその分多い。側面はがら空きあだった。

久世は裏路地と建物の合間を抜け、キュクロプスの後方に出ようとする。

奴の側面を通るときは、細心の注意を払い、手信号てんしごうを使つて移動の合図を部下へ送った。ずん、と重い足音が通り過ぎるのを待ち、路地裏を渡る。

巨人は、自身の圧倒的な力を過信かしんしているせいで細かいことには鈍感どんかんなのか、背後へ出るのには比較的容易であった。

建物の角に身を隠し、彼は部下へ110mm個人携帯対戦車弾L A Mの準備にかからせる。

これは、84mm無反動砲よりも強力な歩兵携帯式の対戦車ロケットランチャーである。ただし、使い捨てであるため、一度発射した後に再装填さいそうけんはできないし、84mm無反動砲のように照明弾などの多目的な弾種だんしゅを撃つことはできない。だが、この場合においては、LAMの方が奴に対しては効果的だろうと判断した。

射手の隊員が、弾頭の先端のプローブと呼ばれる棒状の信管を伸ばし、固定した。これにより、貫徹能力かんてつが向上する。さらに、折り畳まれていたグリッパや肩に当てるストック部分を展開し、構えられるようにした。これで後は安全装置を解除し、レバーを引けば射

撃できる。

「車輛班、今からLAMを発射する。射角に注意するが、外れた場合に備えて一時後退しろ」

建物の角から発射したとして、外れた場合でも車輛班には当たらない角度ではある。だが、跳弾でもすれば危険だ。

『こちら車輛班、了解！一時後退します！』

装甲車と高機動車が、そろそろとバックを始める。

それを怯んだと取ったのか、キュクロプスが吠えた。

棍棒を振り上げ、車輛班に襲いかかろうとする。だが二輦とも、移動中の射撃を嫌い、弾薬の再装填にかかっている重機関銃があるせいで、速度を上げられない。

久世は機を逃さないよう、即座に命じた。

「撃エツ！」

発射の衝撃で、周囲の埃が小さく平等に跳ねる。

後方噴射によって微細な衝撃緩衝剤がまき散らされ、強力なロケット弾の加速による射手への反動を相殺した。

音速を瞬く間に超えた弾頭は、巨人の振り上げた棍棒を持つ腕を、成形炸薬の指向性爆破によるメタルジェットで爆砕していた。

「ウロオオオオオオ!?」

キュクロプスは、自分の腕が消し飛んだことに動転する。同時に、その凶暴な性格ゆえか、久世達の方を振り返ると、近くににあった酒樽を片手で掴み上げ、砲丸投げのようにして投げ飛ばしてきた。

「回避っ!?!」

久世が叫び、隊員らが建物の角へ引つ込む。

直後、猛烈なスピードと自重を持って飛んできた酒樽が、建物の角をぶち破りながら木っ端微塵になった。

大量の飛沫になった葡萄酒の心地よい香りが辺りに充満するが、そんなものを隊員らが楽しむ余裕はなかった。

鋭くささくれた木材の破片が飛び散り、数名の隊員が負傷する。

「があああああ!?!」

「い、痛ええ!?!」

「二人を下がらせろ！重火器を持たない者は手当てするんだ！」

久世が地面に伏せ、そのまま匍匐前進してキュクロプスを確認する。

奴は、自分の吹き飛んだ腕から棍棒を取り上げていた。人間なら死んでもおかしくない怪我のはずだが、怪物はさすがに怪物らしい。